

## 高齢者女性の化粧行動に対する意識

○杉山真理 岩倉由紀 北島美和子 小林茂雄

( 共立女大)

【目的】 我が国においては人口の高齢化が急速に進んでおり、高齢者が物質面のみならず精神面においても充実した生活を送ることは重要な問題である。最近、一部の老人施設で、化粧を通して情動を活性化させる試みがなされ、その効果が報告されている。本研究では、高齢者に対する情動の活性化に対して、化粧がどのように寄与できるかについての基礎的資料を得るために、高齢者の化粧に対する意識について調査することを目的とした。

【方法】 杉並区に在住している健常な高齢者の女性190名(60歳代50名、70歳代96名、80歳代39名、不明5名)を対象として、1995年11月に質問紙面接調査法によりアンケート調査を実施した。調査内容は化粧に対する意識(6項目、3段階尺度)、化粧する目的、加齢による化粧行動の実態などである。調査データはクロス集計やカイ二乗検定の統計的手法を適用し、その特徴について検討した。

【結果】 化粧をすることに対して、約6割が「楽しい」、約8割が「気持ち若返る」と回答した。また、約7割が「高齢者が化粧をすることについてまわりの反応は冷たい」とは思わず、約9割が「高齢者になっても化粧は必要だ」と考えており、化粧に対する意識は肯定的意見が過半数を占めた。しかし、加齢による化粧行動の実態は、約4割が「簡素化した」と回答しており、化粧に対する意識と実態の間には違いが認められた。化粧する目的は、約8割が「女性としての身だしなみ」と回答した。化粧に対する意識と年代との間でクロス集計し、カイ二乗検定を行った結果では有意差は認められず、化粧に対する意識は年代による要因よりも個人による要因により特徴づけることができた。